HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	まちそだて北海道 : ロマンの富良野、ディバイズの十勝
Author(s)	筑和, 正格
Citation	大交流時代における観光創造, 70, 97-118
Issue Date	2008-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34590
Type	bulletin (article)
File Information	p097-118.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

まちそだて北海道
── ロマンの富良野、ディバイズの十勝 ──

筑　和　正　格

1．はじめに

筆者の研究の目的は、「まちそだて」に至る可能性をもつ北海道の活動事例を検証し、この事例を基に類型の形成を試み、それを通じて「まちそだて北海道モデル」を構築することである。そして、本稿はこの研究の導入部をなすものである。

「まちそだて」を提唱する以上、まずその内容が ── 特に、従来の「まちづくり」との差異が ── 示されなければならない。したがって、本稿の冒頭では、事例考察に先立って、両者の比較検討を行う。

事例検証のためには、何点かの観点を設定する必要がある。その際、日本一の農業地域であり、かつ観光資源を豊富に擁するという北海道の地域特性を考慮するならば、「農業」と「観光」という観点が即座に浮上してくるだろう。そして、私見によれば、「農業」と「観光」は、現代人に対するある種の問題提起を内包しているという点で、重要な営みなのである。加えて、筆者は、「観光」行動を規定する要素と「まちづくり（まちそだて）」の基盤となる要素は一致するという見解をもっている[1]。これらの前提を踏まえて、本研究では、諸事例が提示する「農業」と「観光」の特徴ならびに現状と問題点を検証し、さらにそれらを「まちそだて」との関連のもとで考察することに

1　紙幅の都合から、本稿においては、これらの点について詳論することはできない。この議論は別の機会にしかるべき研究誌で行う予定である。

なる。

「まちそだて」は結局は人間の営為である。そして人間の営為を根底で規定しているのは意識や認識である。それゆえ、「まちそだて」は当事者の意識や認識のあり方に密接に関連しているといえる。いやそれどころか、「まちそだて」の成否は、当事者の意識や認識のあり方次第であるといっても過言ではない。したがって、本研究は、事例に登場する当事者の意識・認識を最重要視するものである。

本稿においては、まず富良野地域の事例を上に挙げた観点から考察し、その後、十勝の事例を検討する。富良野についてはすでに一通りの調査を済ませており、事例の「富良野型類型」を一定程度明確に提示できるものと判断している。十勝については、第一次調査を終え、今後の調査のための仮説を立てた段階である。そこで、本稿においては「十勝型類型 Ver.1」の仮設を行うこととする[2]。

2.「まちそだて」とは何か

2-1　都市計画と「まちづくり」

2-1-1　都市計画

「まちづくり」という語が人口に膾炙する以前には、「都市計画」という用語が広く用いられていた。「都市計画」とは、都市計画法に則り行政主導で遂行される、どちらかといえば「まち」のハード面の改良に関する事業のことをいう。

都市に関わる原理として、「居住原理」「経済原理」「統治原理」を挙げる都市計画の研究者西村幸夫は、欧米の都市計画の起源について次のように述べている。「個々の土地利用が経済原理のみで決定され、その結果として都市の空間形成に広域的かつ長期的な視点が欠落するのを防止するために、資本主義の発達と軌を一にして生成してきたのが近代都市計画による強制・制裁・

2　富良野と十勝で取材した全事例の詳細な報告も、別の機会にしかるべき研究誌に掲載する予定である。

支配システムであった。」[3] これは、「欧米の都市計画は、経済原理による居住原理の浸食防止のために統治原理を導入するというメカニズムをもつ」という指摘である。

しかし、我が国の都市計画は、それとは異なった様相を呈している。「急速な近代化を実現するために、都市の形態を整えていくための事業を実施するところに主眼がおかれ、居住原理を尊重するような施策は優先順位が低かった」[4] のが、日本の都市計画の起源である。ここでは居住原理の地位は低いのであるが、そうした統治原理優先の状況に対する「無意識的な異議申し立て」[5] が、「まちづくり」なのであった。

2-1-2　まちづくり

「まちづくり」ということばが使用され始めたのは 1960 年代であるということは、各研究者の一致した見解のようである[6]。「統治原理に対する異議申し立て」としての「まちづくり」は、ハード面を含みつつも、よりソフト面を重視する営みであり、道路・公園・住宅等の建設や整備以上に、地域に良好な雰囲気を作り出したり、様々な面での活気を生み出すことを求める社会的な傾向の高まりを反映している[7]。

しかしながら、その「まちづくり」が今や変質している、と延藤安弘は説く。「近年、行政・事業主体側が公共事業の固いイメージをやわらげるために、〈まちづくり〉のことばを使いすぎる傾向がとみに著しくなった。駅前再開

3　西村幸夫(2005)「コモンズとしての都市」『岩波講座　都市の再生を考える 7 公共空間としての都市』岩波書店 PP.16-17

4　同上　P.17

5　同上　P.18

6　同上／井口貢(2007)『まちづくりと共感、協育としての観光　地域に学ぶ文化政策』水曜社　P.11／佐和和江(2000)「まちづくり活動の心得」『市民のためのまちづくりガイド』学芸出版社 P.118

7　筑和正格（2006)「住民・コンサルタント・行政」『国際広報メディア研究科・言語文化部研究　報告叢書 66 リージョン／カルチャー／コミュニケーション ── どこから来てどこへ行くのか ──』P.24 参照

発・土地区画整理事業・鉄道高架事業などの拠点的・基幹的整備事業にも生活者・市民のための視点は大切であるが、実態は市民参加とは無縁の基準通りの固いモノづくりであるがために、〈まちづくり〉はすっかり手垢にまみれてしまい、言葉の本来的意味の輝きをなくしてしまった」[8] と、延藤はいう。

2-2 「まちづくり」と「まちそだて」

形骸化した「まちづくり」に替わるものとして、延藤は「まち育て」を提唱する。それは「市民・行政・企業の協働により、環境（人工・自然・歴史・文化・産業・制度・情報など）の質を持続的に育み、それにかかわる人間の意識・行動も育まれていくプロセス」[9] と規定される。

本稿においても「まちそだて」という用語を用いることになるが、その背景をなす考え方は延藤のそれとは若干相違している。つまり、本稿では、まず「つくる」と「育てる」の語義に沿って発想するのである。「つくる」とは基本的に無から有を生み出す営みのことをいうのに対して、「育てる」はすでに存在するものを育み、成長させる営みを指す。したがって、「まちそだて」は、すでに「まち」が存在していることを前提とするのである。「まちづくり」は、時系列的に「まちそだて」に先行するものであり、「まちそだて」は「まちづくり」の次の段階の営為である。

では、「まちづくり」の次の段階の営為とは何か。「統治原理」優先の状況に対する「異議申し立て」としての「まちづくり」は、地域に良好な雰囲気を作り出したり、生活を活性化させるという効果を生み出した。しかしながら、その効果は必ずしも長期にわたって持続するものではなかった。一旦「まちづくり」に成功しても、いつの間にかその成功が色褪せたものとなり、「まち」は再び往時の活気を失ってしまうというケースが日本の各所で発生している。成功と失敗のサイクルが繰り返し描かれるのである。果たして、このサイクルは超克が可能なものなのであろうか。それが可能であるとすれば、

8　延藤安弘（2001）『「まち育て」を育む　対話と協働のデザイン』東京大学出版会 P.11

9　延藤（2005）『人と縁をはぐくむまち育て ── まちづくりをアートする』萌文社 P.9

その条件は何か。

筆者は、成功と失敗のサイクルを超えるためには、個々の取り組みの適否を云々する以前に、当事者の意識を問題にすべきであると考える。つまり、当事者の「自己認識の獲得」と当事者間における「価値観の共有」が「まちそだて」には不可欠であると判断している。それゆえに、「〈まちそだて〉が、それにかかわる人間の意識・行動も育むプロセス」であるという規定に同意するのである。本研究は、「まちそだて」とは「内面化された共通の価値観に立脚した営み」、あるいは「当事者を共通の価値の内面化に導く営為」と規定し、この立脚点から各事例を検討・評価するものである。

3．富良野の事例[10]

3-1　生み出されたストーリー ── ロマンの誕生

◎「北の国から」とまちづくり

富良野がテレビドラマ「北の国から」で一躍全国的に知名度を高めたことは、いまさらいうまでもない。詳細は後述するが、富良野の事例が内包する「活性創出度」の測定には、「新結合」という概念の導入が効果的である。この概念に基づいて観察すれば、「北の国から」を生み出した倉本聰と富良野の出会いからは、「異質なものの結合」を看取できる。つまり、「都会性（urbanity）と田園性（rurality）の結合」が存在するのである。

また作品世界と現実の関係に目を向けるならば、そこには「虚構（fiction）と現実（reality）の結合」がある。「もう１つの生活スタイル」を提示する「北の国から」の世界には、現実の富良野の地名が与えられており、現実世界で出くわしそうな人物たちが多数登場する。その限りでは、物語はきわめて写実的なのである。そして、全国的に認知された「北の国から」は、「富良野」

10　筆者は、すでに一度富良野についての論考を発表している：「〝まちづくり〟から〝まちそだて〟へ～富良野の事例から学ぶ～」『観光創造の理論と実践』第四巻（2007）北海道大学。本稿においては、この論考のものと同一の事例を用いながら、新しい角度からの考察を試みている。

という地名を１つのブランドへと高めた。富良野は「もう１つの生活スタイル」を実践するまちと見なされるようになったのである。かくして、虚構は現実化され、富良野の住民もそこに漂うロマンを受け入れ、自明視するようになった。

富良野の発展に関してもう１つ指摘しておかなければならない事実がある。それは、富良野が、ワールドカップも開催された、日本でも有数のスキーリゾートでもあるということである。この背景には、西武による資本投下がある。また、西武のオーナーである堤義明と倉本聰が学校の同級生であったことも興味深い符合である。

上の事実は、富良野がメディアと大資本に支えられて発展を遂げたことを伝えている。それは、富良野の発展が「外発的発展」であったということでもある。しかし、外部への依存には、危うさがつきまといがちである。この問題はいかに解決すべきか。

3-2　シュンペーター（1883-1950）：『経済発展の理論』（1926）

◎「新結合 neue Kombination（innovation）」

オーストリアの経済学者シュンペーターは、経済発展の原動力として「新結合」という概念を挙げている。この概念は、「イノベーション」と翻訳され

表１　「新結合」遂行の５ケース

①	消費者にまだ知られていない、**新しい商品の生産**、あるいは商品の新しい品質の開発。
②	当該生産分野では未知の、**新しい生産方法の導入**。この生産方法は、科学的な新発見に基づく必要はない。また、ある商品の新しい販売方法の工夫からも生まれうる。
③	**新しい市場の開拓**。つまり、当該生産分野がそれまで未参入の市場の開拓。この市場が既存のものか否かは問わない。
④	**原料あるいは半製品の新しい調達先の獲得**。この調達先が既存のものかどうか ── つまり、単にそれに気づいていなかったのか、獲得不可能と見なされていたのかどうか ── は問わない。あるいは、これから作り出さなければならないか否かは問わない。
⑤	**新組織（団体）の実現**。つまり、独占的地位（たとえばトラスト）の形成。あるいは独占の打破。

て現代社会でも流通している。シュンペーターは、「生産」を、「われわれの利用しうるいろいろな物や力を結合すること」と捉える。そして「旧結合」から、「連続的に」（＝徐々に変化しながら）「新結合」に至るのではなく、「新結合」が「非連続的に」現れる場合にのみ、経済の「発展」がある、と論じている[11]。つまり、それまでになかった新しい「結合」を人為的に作り出すことが「発展」につながるのである。シュンペーターは、表１のように、発展をもたらす５つのケースを提示している。

3-3　富良野における「新結合」の事例

3-3-1　25 年前の「新結合」=「まちづくり」

前述した倉本聰と富良野の出会いは、上の観点からはどう評価できるのであろうか。「芸術（アート）と市場（マーケット）の結合」と命名可能なこの「新結合」の効果を、上記の遂行ケースに当てはめて判断すれば表２のようになる。

この事例は、すべての項目を満たしている。「北の国から」のヒットとそれによる富良野の活性化は、シュンペーターの理論に合致しているのである。

表２　アートとマーケットの結合

①新しい商品の生産 ──「もう１つの生活スタイル」を伝える物語
②新しい生産方法の導入 ── 映像による物語の作成
③新しい市場の開拓 ── メディアによって伝えられた「１つの生き方」が、日本を担う階層の心に訴える。
④原料の新しい調達先 ── 富良野という土地
⑤新組織の実現 ── 全国ネット（フジテレビ）と連携

3-3-2　現在の「新結合」=「まちそだて」の可能性

倉本聰は、現在も富良野に居住しており、西武資本も富良野から引き上げてはいない。その意味では、富良野は当面安泰であるともいえよう。しかし、

11　シュンペーター、ヨーゼフ（塩野谷・中山・東畑訳）（1977）『経済発展の理論』（上）岩波書店 PP.180-184

そのことで「外発的発展」の危うさが解消したわけではない。現に、すでに放映を終えて久しい「北の国から」は忘却の世界に入り込みつつある。「北の国から」の「まちづくり」は、その効力を失いつつあるのである。

しかし、富良野の人々にもむろん「内発的発展」への志向は存在している。筆者は、2006 年 7 月から 2007 年 2 月にかけて数回にわたって富良野地域において「まちそだて」の萌芽を探求すべく、関係者への聞き取り調査を行った。その結果、富良野地域においては「農業」と「観光」が地域のアイデンティティの源であり、両者の結合が地域活性化の起爆剤となるという共通認識が生成しつつあることが確認できた。「内面化された共通の価値観に立脚した営み」が「まちそだて」の核であるならば、この住民の認識は注目に値する。以下では、「農と観光の結合」「環境と観光の結合」という観点から、富良野で発掘した事例のうち、奏功の可能性が高いものを 4 例選択して提示することにする。

①「農と観光の結合」

ａ.「生産者と調理者」の結合：天心農場とレストラン「ル・シュマン」

富良野地域の農産物の品質と味に魅せられて、富良野にやって来たフランス料理シェフ、甲斐宏和氏は、「地元の安全でおいしい食材を地元で提供する」という意図を実現するために、学習・研究する農民である「天心牧場」オーナーの北川光夫氏と緊密な協力関係を結んでいる。彼らの協働がもたらす効果は表 3 のように判断される。

表 3　生産者と調理者の結合

①新しい商品の生産 ── 新しい素材を生かしたレストランの新メニュー
②新しい生産方法の導入 ── 廃棄品（外品）を素材にする。
③新しいマーケットの開拓 ── 生産者が、レストランに直接生産品を売る。
④原料の新しい調達先 ── レストランが、生産者から直接原料を買う。
⑤新組織の実現 ── 生産者とレストランとの連携。

ｂ.「生産者と消費者」の結合：「ゆうふれの里」と消費者

富良野市山部地区では、農家の女性有志が集り、自分たちの生産物を自分たちで加工して、消費者に手渡そうというグループ「ゆうふれの里」が結成

されている。彼女たちは間引きしたメロンを材料に福神漬けを作り、それを、通常の流通過程を経由せず、直接消費者に販売している。

上記の２事例は、共に大きなマーケットを呼び込む可能性をもっている。「ル・シュマン」は、富良野を来訪する観光客にその名を知られているばかりか、ここで食事をするためだけにわざわざ本州からやって来る顧客も存在している。また、「ゆうふれの里」については、本州のある旅行代理店が関心を示し、彼女たちの営みを営業プランに組み込む構想を抱いているという事実がある。つまり、農業と密接に関連しているこれらの営みは、同時に有力な観光資源となる可能性を内包しているのである。

表４　生産者と消費者の結合

①新しい商品の生産 ── チーズともちを結合させた「もっちー」
②新しい生産方法の導入 ── 新しい材料から製品を作る。
③新しいマーケットの開拓 ── 既存の流通ルートを経ずに、消費者に直接売る。
④原料の新しい調達先 ── 廃棄品を素材にする。
⑤新組織の実現 ── 農家の主婦の協同

②「環境と観光」の結合

ａ．「廃棄物と資源」の結合：生活ごみの再生利用

1983 年当時、富良野市では、生活ごみの処理が切実な問題となっていた。ごみの処理は、通常住民の生活圏の外部で行われるが、富良野においてはそこは農地に隣接する場所であり、無造作なごみの廃棄や埋め立ては農作物に害を与えていたからである。富良野市はリサイクルという処理方法を採用し、この「ごみのリサイクル方式」で全国のさきがけとなった。ごみを処理の対

表５　廃棄物と資源の結合

①新しい商品の生産 ── 廃棄物を原料とする新しい肥料
②新しい生産方法の導入 ── 廃棄物から肥料と燃料を作る。
③新しいマーケットの開拓 ── 環境問題に関心をもつ消費者に訴える。
④原料の新しい調達先の獲得 ── 廃棄物を原料にする。
⑤新組織の実現 ── 自治体の部分的広域連合

象として見るのではなく、様々なものを生かす資源として捉えるという、エコロジカル・シンキングに立脚した視点は、むろん農業の発想に依拠している。

ｂ.「視覚消費と再生」の結合：自然の再生〈富良野自然塾〉

NPO 法人「富良野自然塾」は、かつてゴルフ場であった場所に植林し、森に戻す活動を行っている。富良野プリンスホテル・ゴルフコースの跡地利用について、堤義明から相談を受けた倉本聰が再生を提案し、跡地を利用して植樹と環境教育を行うことにしたのである。その結果、環境保護・景観保全の思想が、１つの教育プログラムへと結実することとなった。自然環境に触れることによって環境への関心を呼び覚まし、環境保全の重要性を認識し、その後に植林という返還作業を行う、という一連のプロセスが構築されたのである。ここでは、視覚の対象として消費される自然と、創造されるものとしての自然が並存している。「自然の消費」と「自然の創造」が関連しているのである。さらに、「環境」を「教育プログラム」のもとで体系的に体験させる取り組みにも新鮮さがある。

ここに取り上げた 2 事例も、「循環」という農業的思想に依拠しており、同時に観光マーケットを獲得する可能性を示している。ごみ処理場へはすでに中国や東南アジアからの視察団が来訪しているが、「産業観光」という領域でこのリサイクル事業に注目している観光業者も存在している。富良野自然塾に関しては、上述の「環境教育プログラム」が注目を集めていることからも、将来性は認められる。また、この「教育プログラム」が「学習観光」の目的に適うものであることは間違いない。

注目をひくのは、ここでも倉本聰と堤義明の関係が「教育プログラム」誕

表 6　視覚消費と再生の結合

①新しい商品の生産 ── 環境教育
②新しい生産方法の導入 ── 五感を通しての自然体験
③新しい市場の開拓 ──「もう１つの生活スタイル」に関心をもつ社会層に訴えかける。
④原料の新しい調達先 ── 自然・環境を素材とする。
⑤新組織の実現 ── 三井住友銀行の協賛

生に大きな役割を果たしていることである。加えて富良野自然塾の運営が三井住友銀行の協賛を受けていることも注目に値する。ただし、資本による支援が大きければ大きいほど、それが途絶えた場合の打撃も大きくなることを忘れてはならない。「外部依存」の弱点がそこにある。

「新結合」事例に登場する人々が皆、現代社会で支配的な通念と生活様式を問い直している、という点についても触れておきたい。この事実は、彼らが新しい意識をもち、それに基づいて行動していることを伝えている。つまり、「育まれた意識」が「活性化創出」を目指す行動の基底にある、と見なすことができるのである。これは、彼らの取り組みが「まちそだて」に至る可能性を示すものだが、それについては次項で論じる。

3-4 「夢と観光」

3-4-1　ロマンの富良野の登場人物

富良野における調査で、筆者は何名かの興味深い人物に出会った。それは、大工棟梁の弟子・横溝慶行氏、富良野塾 OB の演劇人・久保隆徳氏、そして「ふらののガラス屋さん」山口一城氏である。彼らは皆、自己実現を希求する旅の途中で、偶然富良野にやってきた。そして、援助者と出会って、納得できる生き方を発見できた。彼らは今、溌剌として富良野を拠点に活動している。彼らにとって、富良野は貴重な「出会いの場」であり「教育・学習の場」なのである。「新結合」事例の場合と同様に、彼らの出会いと協働からも、「環境の質を持続的に育み、それにかかわる人間の意識・行動も育まれていくプロセス」を看取できるのではないだろうか。

また、大工の棟梁柿本又一氏は、「富良野は、今までは観光地という部分の方が強くて農業とずれている部分があったが、若者が危機意識をもち、外来者もいろいろと努力して、やっと農業と観光がうまくつながりだした」[12] と説明する。この発言の意図を、富良野の若者の間に「農業と観光のまち富良野」という共通の自己認識が生まれていると解釈できるならば、富良野ではまさ

12　廃材を用いて建築を行う、富良野市在住の大工棟梁・柿本又一氏への聞き取り調査より。

に「まちそだて」が軌道に乗り始めているということになろう。

3-4-2　共通の価値理念は？

「まちそだて」のもう１つのポイントである「共通の価値理念」についても考察を加えたい。富良野の発展には、大資本とメディアに支えられたという面があり、そこには「経済主義」への依拠を見いだすことができる。しかし、ここにあるのは単なる「経済主義」ではない。例えば「アートとマーケットの結合」が伝えるように、この「経済主義」は「非経済主義」を支援する役割を演じているのである。良好な環境の創造を旨とする「富良野自然塾」の活動を大資本がサポートしているのも、その一例である。

これを「経済主義による、密かな文化領域の浸食」と解釈することはもちろん可能であるが、ここでは逆の視点に立つことにする。つまり、富良野の事例がほぼ例外なく示す「非･経済利益追求優先主義」に着目するのである。聞き取り調査の最中に、筆者は「非・経済利益追求優先主義」を明確に宣言する何人もの人々に出会った。それが富良野の社会を根底で規定している価値理念か否かについての判断は現時点では保留するが、「非･経済利益追求優先主義」に立脚した活動と「まちそだて」の関連には、今後も大いに注目していかなければならない。

3-5　事例の類型化の試み

富良野における諸事例の類型化は、必ずしも容易な作業ではない。というのも、検討した諸事例が示す構図は、大資本とメディアが背景にあるものと、その逆の草の根型のものとに２分されるからである。そこから、事例が提示する「外発性」と「内発性」のどちらに重点を置いて判断するか、という問題が生じる。前項での指摘をもとに、「〝経済主義〞と〝非経済主義〞の折衷型」とすることも可能だが、果たしてそれで済むものなのか。

そこで、本稿では、前項における考察に対する矛盾を承知の上で、富良野の事例を、あえて「資本・メディア依拠型」と呼ぶことにする。なぜなら、現時点で明らかな「成功事例」と見なされるのは「北の国から」であり、また、ひとまず成功しているのは「富良野自然塾」のみだからである。両者の

背景には資本とメディアが存在する。そして、富良野の活性化は、今なお、相当程度にこの両者の集客力に依拠しており、この基盤の存在ゆえに「ロマン」の醸成が可能だともいえるのである。富良野には年間200万人を越える観光客が集まるが、この数は、資本やメディアによる効果なしには考えられないのではないか。「草の根型」の営為のみでは、これだけの数を達成することはきわめて困難であろう。

しかしながら、「草の根型」の営為自体は「意識や認識の醸成」にきわめて有効であることを、再度想起しておきたい。したがって、この営為が成熟・拡大し、経済的基盤を確立できるのであれば、そこには新種の「まちそだて富良野タイプ」が成立するかもしれないのである。

４．ディバイズの十勝の事例

十勝の事例研究においても、「農業」と「観光」という観点を設定し、事例の検証を通じて人々の意識と認識を探りつつ「まちそだて」を考察する。今ここで「まちそだて」と述べたが、それは、富良野と同様に、十勝地域も「まちそだて」を志向すべき段階にさしかかっていると見るからである。つまり、十勝は、一度「まちづくり」に「成功」したものの、今、その「まちづくり」の結果が再考を迫られているのである。「農業王国」として経済的「成功」を収めた十勝も、都市インフラの充実にひとまず「成功」した17万人都市帯広も、一方は農業を巡る環境の変化という不安定要素を、他方は中心市街地の空洞化に代表される衰退要素を抱えている。この状況を克服するものこそ、「成功と失敗のサイクル」を超える「まちそだて」にほかならない。

ところで、本稿の表題で筆者は「ロマンの富良野」という表現を用いた。この形容詞を用いたのは、富良野という地域が、様々な面で「北の国から」によって形成されたイメージに依拠しているからであり、また、夢を抱いてやって来た外来者を快く受け入れ、夢の追求を容認・支援する開放的な空間でもあるからである。

それでは、表題中の「ディバイズの十勝」は、何に由来しているのか。この「ディバイズ」とは、十勝地域の人々のメンタリティの形容である。以下

では、まずそれについて説明を加えることとする。

4-1 「民」の伝統・旺盛な自立心・ディバイズ（devise）＝「創意・工夫」する

十勝では「屯田兵」ではなく、「開拓団として岐阜や北陸から入植した人々が開拓の礎を築いた」[13]。十勝の入植者は、少なくとも当初は、明治政府の支援なしの、自力の開拓を余儀なくされたのである。加えて、厳しい気象という自然環境もある。入植者たちは、極寒の気候条件と闘いながら、遂行可能な農業の種類と形態を模索し、構築していった。そして、この「〈官〉の後ろ盾を欠いた入植」と「厳しい気候・自然環境」という 2 条件が、十勝特有のメンタリティを育んでいる。

東洋農機株式会社会長の渡辺純夫氏は、十勝の人々がもつ「旺盛な自立心」を指摘する。また、『しゅん』『northern style スロウ』の編集長・萬年とみ子氏も、「十勝では、何につけてもすぐに自分で起業しようという人が多い」と語る。「旺盛な自立心」こそは、十勝のメンタリティを具現するものである。

外部に頼らず、必要なものを自力で作り出すためには、創意工夫が不可欠である。十勝には様々な「工夫の品」がある。この「創意工夫する＝devise」という精神は、十勝における「新結合」の母胎となるばかりか、「まちそだて」プロセスの考察に際しても、１つのキーポイントとなるだろう。

4-2　農業の現状と問題点

富良野の場合は「農業」と「観光」が結合しつつある。十勝の場合はどうか。十勝地域における農業と観光の関係の考察に至る前に、まず農業の現状と農業が抱える問題点を確認しておかなければならない。

4-2-1　農業＝十勝の基幹産業

十勝の農業の総生産額は 2,406 億円（2006 年）で、北海道全体の生産額の

13　十勝農業協同組合連合会企画室・町智之調査役の指摘。筆者は、2007 年 3 月と 9 月に、帯広市と中札内村で「観光と農業」を念頭に置いて聞き取り調査を行った。「十勝の事例」の項で挙げられる人名と肩書きは、その際に筆者がお話を伺った方々のものである。

22%を占めており、全道14支庁の中でトップの額である。帯広市役所の都鳥真之氏は「十勝の農家は日本で最も豊かです。そして農協が十勝地域で最大の産業なのです」[14] と語る。このように、十勝の「まちそだて」を考える場合にも、「農業」という要素は不可欠の検討事項なのである。しかし、唯一の基幹産業であるがゆえに、もしも農業が打撃を受けるような事態が発生するならば、十勝の地域社会全体が深刻な被害を被ることになろう。

4-2-2　問題提起 ── 十勝は、農業だけでやっていけるのか？

十勝の基幹産業である農業の基盤はたして盤石なのだろうか。これについては、必ずしも楽観視できないだろう。その理由として、①「離農現象」と②「日豪EPA（Economic Partnership Agreement）交渉」が挙げられる。まず、表7を見よう。表から明らかなように、農家戸数は目に見えて減少している。離農の最大の原因は、後継者問題である。少子高齢化現象による労働力不足が農業の世界でも顕著になっているのである。これが、十勝の農業が直面する深刻な問題の1つである。

表7　農家の戸数の推移　（単位　戸数）

1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年
11,705	10,923	9,954	8,681	7,582	6,743

（出典：北海道農林水産統計年表）

現在「日豪EPA（自由貿易協定）」の協定締結交渉は難航している。その大きな理由の1つは、オーストラリアが関税撤廃を求める「関心品目」と、日本が守りたい「重要品目」（牛肉、小麦、大豆、乳製品、米、砂糖etc.）が一致している点にある。その中で、牛肉、小麦、大豆、乳製品は、すべて十勝の特産品である。したがって、もしこれらの品目の関税が撤廃され、オーストラリアから安価な農産品が大量に輸入されるならば、十勝地域の農業が甚大な影響を受ける恐れがある。

14　帯広市役所農政部農政課産業担当課長兼商工観光部産業連携室主幹・都鳥真之氏

4-2-3　解決策は？

上述の問題点を克服する方策として、常識的には、①農業の強化、②他産業の育成、が考えられる[15]。①に関しては、「量で利益を出す方策から、質で利益を出す方策への転換」や「農業の企業化」等が考えられる。また、後継者問題解決の可能性として、農業への「女性の参入」を推進させる方策を主張する声もある[16]。②は、経済基盤強化のためには合理的な方法であるが、無条件に実行可能なものではなさそうだ。帯広市役所の井上猛氏は「農以外の産業の育成がなかなかむずかしいのです。特に農と工の融合にむずかしさがあります」[17] と説明する。農業の影響力があまりにも強大なので、十勝では農業と直接関連しない産業の育成が困難なのである。

そこで浮上するのが、③「農業と観光の結合による効果創出」である。上述の事情を鑑みるならば、農業を支える他産業として「観光」を提案することは、理に適ったものと考えられる。なぜならば、農業に関連しない産業の育成が、十勝の現状では相当な時間と多大な労力を必要とする困難な事業であるのに対して、観光は、その資源がすでに現実的にも潜在的にも存在しており、資源の実態を把握した上で戦略的な取り組みを行えば振興の可能性が高いからである。

4-3　観光の可能性

4-3-1　現状と問題点 ── 戦略的取り組みの欠如

十勝農協連での聞き取り調査では、「日本で最も豊かな」十勝地域の農家は、経営が順調であるという状況下で、観光との連携には全く無関心なのが一般的だという指摘を受けた。無関心どころか、観光側からの接近を迷惑視する傾向すらあるという。十勝農業の規模と安定した現状を考慮すれば、この現状は無理のないところなのかもしれない。また、農業者の脳裏には、農業や

15　もちろん「補助金」の問題もあるが、ここでは触れない。

16　中札内村「想いやりファーム」社長・長谷川竹彦氏。長谷川氏は、農業は女性向きの職業であると考え、牧場運営に女性を積極的に参画させている。

17　帯広市役所商工観光部産業連携室主査・井上猛氏

環境への思慮に乏しい単なる物見遊山の観光客という、ステレオタイプのイメージが焼きついているのかもしれない。

しかし、それでは十勝において農業と観光の結合は希有な事象かといえば、実は必ずしもそうではない。たとえば、鹿追町では 1989 年に「鹿追町ファームイン研究会」を立ち上げ、その後も積極的に活動している。ファームインは、都会人を迎え入れ、その人々に現実の農作業を見せ、あるいは体験させる営為であり、人はこの体験を通じて、農業という営みを認識し、それを通じて「食」や「命」そして「自然」について再考する機会をもつのである。現在では、この会のメンバーが、自力でログハウスを作り牧場レストランを始めたり、「観光農園」を開園するというケースが生まれている。彼らの地道な活動は、徐々に効果をあげつつある。また、鹿追地区に限らず、新得・豊頃・足寄などの地域にもファームインを行う牧場が存在している。単純に、十勝地域における農業と観光の連携の不在を語るわけにはいかないようである。にもかかわらず、ファームインが十勝全域にわたって活発に展開されているという印象は薄い。それに関して、北海道大学観光学高等研究センターの佐藤誠教授は「鹿追町のファームインは、古い歴史をもっているが、大資本をバックに運営されているのではなく、草の根運動的な取り組みなので、まいた種が芽を出し花を咲かせていくように、効果が現れるまでに時間がかかります」と解説する。鹿追の事例をどう解釈し、判断すべきか。富良野のように大資本とメディアに依拠する方策を探るべきか。筆者は、鹿追町の関係者のもとで聞き取り調査を行い、判断材料を十分に収集した後に、改めてその点について考察するつもりである。

表 8 は、「新結合」図式のファームインへの適用である。表から、ファーム

表 8　農業の日常作業と体験学習の結合：ファームイン

①新商品 —— 生産の営みが教材になる。
②新生産方式 —— 日常を商品にする。
③新市場 —— ナチュラルライフに関心のある社会層を呼び寄せる。
④新調達先 —— 農家の日常。
⑤新組織 —— 農業従事者と都市生活者の連携。

インが「発展」の可能性を内包していることがわかる。

ただ、十勝地域全体で観光への戦略的な取り組みが欠けているという指摘が現実になされていることも、また事実なのである。帯広市役所の都鳥氏は「道南・道北・オホーツク地域とくらべて、十勝が最も観光入込数が少ないのです。戦略的ネットワークがまだ存在しないということも、その大きな理由の１つです」[18] と語る。この件に関しても、今後調査を深めていく必要がある。

4-3-2　観光資源

前項では、十勝における農業と観光の連携の実態について概観し、連携が現状では必ずしも十分ではない、という感触をえた。この項では、将来的な農業と観光の結合への潜在的可能性を、「新結合」理論を導入しながら探ることとする。

①　景観の体験 ── シーニックバイウェイ

土地の広大さゆえに、北海道内の移動には長い時間を必要とする。観光行動を、目的地に到着してその地の自然・文化・歴史に触れるものと規定するならば、移動にかかる長い時間は負の要素となる。しかし、移動自体に喜びが伴うならば事情は変わってくる。「シーニックバイウェイ」は、人が移動に際して目撃する（自然・農業）景観に魅力を与えて、移動そのものにも喜びを与えるという目的から構想されたものである。北大佐藤教授によれば、現在十勝では２ルートが設定されているが、そのうちの１つはかつて「馬の道」であったもの、もう１つは開拓時に人々が広尾港から帯広に向かって築き上げた道の一部だ、とのことである。つまり、十勝のバイウエイは、景観美を

表９　移動と景観鑑賞の結合：シーニックバイウェイ

①新商品 ── 移動に連動して変化する景観が鑑賞対象となる。
②新生産方式 ──「移動」という観点で景観を商品にする。
③新市場 ── 固定的視点からの景観に関心の薄かった社会層を引きつける。
④新調達先 ── 固定的視点からのみ捉えられていた景観
⑤新組織 ── 地元関係者・運輸業界・行政の連携。

18　帯広市役所農政部・都鳥真之氏

提供するに留まらず、歴史的由来をもつことで、「学習観光」の素材にもなっているのである。

②　まちづくりプロジェクト ――「ホコテン」

帯広市の歩行者天国は、「オビヒロホコテン」と呼ばれている。まちの中心部が空洞化するという問題は、帯広市にも重くのしかかっている。「ホコテン」は中心市街地の活性化を目指す取り組みであり、人々が「まち」を体験する「広場」を提供する。「ホコテン」は帯広在住者にとっても外来者にとっても「非日常空間」であり、したがって「ホコテン」を訪れる人は、原理的には観光客と同様の体験をすることとなる。

農業と観光の結合の観点から興味深いのは、「ホコテン」で野菜の直売、十勝特産の乳製品やワイン、パンの販売のほか、環境保全を意識した催しも行われているということである。17 万人の人口を擁する帯広市は、人口 2 万 6 千人の富良野市に比べれば大都市性がはるかに高く、それだけ「自然性」から乖離しやすい条件下にあるが、「食」と「環境」というキーワードのもとに農業と接触する機会を保持し続けるならば、人工性の増大に起因する日常生活の自然からの離反とその弊害を抑止できるであろう。農業と観光が都市において結合しうる一例である。

第一次調査を終えた段階で、「ファームイン」「シーニック」「ホコテン」について理念型的「新結合」図式を組み立ててみたが、興味深いのは、各表から明らかなように、現在十勝地域で取り組みが開始されている事業は、程度の差はあるが、「新結合」遂行の 5 項目をすべて満たしているという事実である。したがって、今後の事業遂行の手段と方法を誤らなければ、発展可能性は十分に期待できるだろう。

表 10　日常空間とイベントの結合：ホコテン

①新商品 ―― 都市の中の「広場」
②新生産方式 ―― 交通のインフラを集客のインフラにする。
③新市場 ―― 市民と来訪者を中心市街地に集める。
④新調達先 ―― 交通の場と捉えられていた道路。
⑤新組織 ―― 実行委員会・商店・行政の連携

4-4　学の貢献

十勝地域の今後の発展可能性を展望するうえで見逃せないファクターが１つある。それは、大学の存在である。その点で、十勝は富良野地域よりも有利な条件を備えている。大学は総合的な知の拠点として地域に強力な貢献をなしうるが、富良野地域には、その大学が存在しないのである[19]。そこで、弱点克服のために、北海道大学大学院農学研究院と包括連携協定を結んでいる。しかし、やはり地元に大学があることがもたらすメリットはより大きいだろう。一番の長所は、おそらく、大学の構成員が地元の諸課題に対して当事者意識をもちうるということではないだろうか。

十勝地域に帯広畜産大学が存在していることの意義は非常に大きい。帯広畜産大学地域共同研究センター長の関川三男教授は、畜産大の役割をこう説明する。「地域共同研究センターは、産官学協同の取り組みを行うためのセンターで、地域の他のアクターとの協働を重視しています。……当センターは、都市エリアと農村エリアを結びつけることも重要な役割であるととらえています。様々な広報面での取り組みと、地域のアクターとメディアとの仲介も業務内容の１つです。」知の拠点としての大学が、地域、特に都市部と農村部とのカタリスト（catalyst）の役割を果たしているのである。

さらに、「教育機関」としての大学が、現実社会に隣接した場で人材養成を行っていることも看過してはならない。関川教授は「私たちが行っている人材育成事業は、基本的に社会人を対象としております。この事業実施の背景には、〈大学はまち全体の教育に責任がある〉という考え方があります。事業の基本テーマは、〈環境問題と経済性〉で、小樽商大からも先生を招くなどして講師陣を充実させ、明確な目標をもつ人間の養成を目指しています」[20]、と人材養成事業の内容を解説する。

畜産大学であるからには当然のこととともいえようが、農村部への視線をも

19　確かに、富良野市には「東京大学演習林」が存在するが、筆者の知る限りでは、「総合的な知の拠点」としての役割は果たしていないように思われる。しかし、今後、この点についても調査してみたい。

20　関川三男教授

ち、「環境」教育を実践することが、農•畜産業の振興に対してはいうに及ばず、観光振興の地盤形成にも貢献していることを確認しておきたい。

4-5　十勝型事例類型の仮設

十勝の全域にわたる農業と観光の連携はいまだ顕在化してはいないようだが、にもかかわらず、諸処に意欲的な取り組みが存在することは確かである。鹿追町のケースや、本稿では紹介しなかったが、「紫竹ガーデン」の取り組み、そして農業と観光の連携の必要性を熱心に訴える帯広市在住の人々の姿がその現れである。ただし、富良野が体験したような観光産業の側からの大規模な資本投入はない。これらを考慮すれば、十勝における諸事例から、「草の根型」という類型化ができそうだ。「大きな後ろ盾をもたない、地道で根気強い活動」という十勝に付随するイメージは、開拓期以来変化していないのかもしれない。

「農業と観光の結合」が重要であるという観点から見れば、十勝における当事者の認識・意識の成熟度は十分ではなく、したがって「まちそだて」も初期段階にある、ということになる。しかしその一方で、結合に向かう取り組みは現実に存在し、地道ではあるが着々と成果を収めてもいる。それゆえ、確かに時間は要するかもしれないが、将来的に「農業と観光の新結合」について、共通の理解が築かれる可能性はあると判断できよう。まさに、「ディバイズの十勝」の力量発揮が待たれるのである。

表 11 は、「ファームイン」「シーニックバイウェイ」「ホコテン」の 3 事例における、意識・認識ならびに共通の価値理念の醸成度について、筆者の現状における判断を示したものである。「ファームイン」の当事者間では、自己認識と価値理念の共有度がかなり高まっているものと推測されるが、「ホコテン」は、この点に関してさらに努力が必要であると思われる。「シーニック」については、まだ未調査の段階である。各取り組みについて、今後、関係者の聞き取り調査を進めて、評価をさ

表 11　自己認識の共有と共通価値理念

	自己認識	価値理念
ファームイン	○	○
シーニック	?	?
ホコテン	△	△

らに精緻化していかなければならない。

5．おわりに

本稿の末尾に、筆者がこれまでに収集したデータに基づく、富良野・十勝両地域の比較対照表を提示する。左側コラムの「ネットワーク」とは、「まちそだて」グループ間の連携のことである。また「女性の活躍度」は、「まちそだて」における女性の活躍の顕在化の度合いを意味する。今後、「まちそだて」において女性が果たす役割はますます重要度を増すことが予測されることから、検討項目に加えたものである。

表の内容は、当然、今後の調査の進展次第で変更されることがありうる。

表 12　富良野と十勝の理念型的対照表

	富 良 野	十　　勝
類型	資本・メディア依存型	草の根型
メンタリティ	優しさ	自立性、積極性
人間関係	融和性、開放性	団結性
農業	観光と並ぶ基幹産業 畑作中心 多品種・適量	唯一の基幹産業 畑作　&　酪農 重点品目・大量
観光のアピール・ポイント	素朴な自然景観 物語性	雄大な自然景観 都市文化
観光と農業の結合	結合度が高い、積極的	局所的に存在、無関心派も存在
女性の活躍度	中程度	かなり高い
ネットワーク	地域網羅ネットの形成中	局所的にのみ存在する
産官学連携	産と官の連携は緩やか 学との連携は、地域外(北大)と緩やかに	産と官の連携は密 学との連携は、地域内(畜大)で密接に